

北奥における古代の鉄器について

齋 藤 淳

はじめに

日本列島における鉄器の導入は、九州北部を中心に弥生時代早期より始まったとみられ^(注1)、中期前後には舶載鉄素材等を用いた鉄器生産（鍛冶）が開始されたと考えられている。中期から後期にかけては、「クニ」同士の争いを背景に、鉄製武器が発達普及するとともに首長権が拡大の一途をたどり、やがて鉄器が集中的に副葬される巨大墳墓の出現に至るとされる。端的に述べれば、鉄器の在り方が、技術・経済・社会・政治等の変革と変遷を反映していると考えられている。

翻って本州北端に位置する北奥地方^(注2)においては、鉄器はどのような役割を果たしてきたのだろうか。本稿は、右の課題に従って当該域における鉄器の出現から普及発展までを概観し、地域社会の変遷との関わりのなかで、鉄器がどのように位置づけられてきたのかを考察することを目的としている。

弥生時代（続縄文時代前半期）以前／黎明期

北奥地方においては、弥生時代前期の段階に弥生文化を受容し、弘前市砂沢遺跡や田舎館村垂柳遺跡等津軽地方において、当該文化を表徴する農耕文化の所産である水田・コメ・木製農具等が発見されている。しかしながらこれらの遺跡では、弥生文化を構成する要素の一つである鉄器が欠落しており、生産具・工具を中心に石器が主体を占めることが明らかである。

そのような一般的な状況下、弥生時代前期の大間町大間貝塚^(注3)、あるいは中期の川内町板子塚遺跡^(注4)など、下北地方に所在する遺跡から、きわめて断片的ながら鉄片（刀子？）の出土が報告されている。板子塚遺跡においては、各種の石器・玉類ほかが副葬された弥生中期の土壙墓が9基検出され、そのうち第8号土壙墓から134点の石鏃・ヒスイ製勾玉とともに、小鉄片が発見されている。

一方津軽海峡をはさんだ北海道では、釧路市貝塚町1丁目遺跡における縄文晩期後葉の鉄片が知られているのをはじめ、石狩市紅葉山33号遺跡・羅臼町植別川遺跡など続縄文時代前半期以降の土壙墓から、絶対量は少ないものの鉄片や刀子・鏃・短剣等の鉄器が継続的に出土している^(注5)。

当該期には、一般墓に比して格段に副葬品の多いいわゆる多副葬墓が出現し、集団の首長墓と解されているが、鉄器はそれらに伴う場合が多い^(注6)。板子塚遺跡第8号土壙墓も多副葬墓と見なすことが可能であり^(注7)、鉄片が遺構に伴うと仮定した場合は^(注8)、利器としての性能よりもむしろ、稀少性ゆえに琥珀・ヒスイ等と同等の価値を有していたと考えられる。

ところで当該期における北海道ならびに下北地方に散見される鉄器は、どのようなルートでもたらされたのであろうか。続縄文時代前半期は、本州において北海道系遺物が目立たない時期であるとともに、北奥地方における鉄器の稀薄な出土状況を見るかぎりには、当該域を経由してもたらされたものが主体とは考えにくい。既に鉄器が普及している地域から直接もたらされたか、あるいは一部の製品は、大陸から北回りでもたらされた可能性がある^(注9)。

弥生時代後期、東北地方全域は、天王山式土器が卓越する圏内となる。天王山式期においては、石

鉄の減少が認められるとされるが^(注10)、鉄器の普及に起因する現象なのかどうかは、当該期の遺構が少ない状況とあいまって、鉄器出土例が寡少であるため判然としない。

総じて北奥地方においては、弥生時代における鉄器の痕跡は稀薄であり、技術・経済・社会等に大きな影響を及ぼすまでには至っていない段階ととらえられる。

古墳時代（続縄文時代後半期）／導入期

弥生時代末から古墳時代（続縄文時代後半期）に相当する3世紀後葉から6世紀代にかけては、土器や墓制をはじめとする文化内容や生活様式、集団間の諸関係等について、東北地方の南と北において明瞭な違いが生じる時期である。仙台平野から置賜盆地、庄内平野以南の東北部は、北陸や関東からの文物流入により古墳文化が成立する。

弥生時代末に方形周溝墓が出現し、いち早く古墳文化を受容した福島県会津地方については、土器様式や竪穴住居跡の構造から北陸地方の影響が考えられている^(注11)。東北部地域では、前方後円墳や竪穴住居跡に伴って各種の鉄器が出土するとともに、5世紀後葉～6世紀初頭頃の羽口・鉄滓を伴う鍛冶遺構が確認されており^(注12)、この頃には既に鉄の加工が開始されたと考えられる。

一方、北奥地方においては、後北C2-D式や北大式といった北海道系の土器や墓制が津軽海峡を越えて広がる段階である。北海道系土器を伴う土壇墓から、鉄製の刀子や農工具が出土する例が増加し、鉄器の本格的な導入期ととらえられる。これらの鉄器は、共伴する土師器・須恵器等の存在から、東北部の古墳文化との密接な連携、あるいは活発な交流によってもたらされたことがうかがわれる。

秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡では、6基の土壇墓から後北C2-D式、弥生終末期の土器とともに板状鉄斧とされる鉄器^(注13)、岩手県盛岡市永福寺山遺跡からは7基の土壇墓から弥生終末期の土器（赤穴式）、後北C2-D式、塩釜式と目される土師器とともに刀子・鉄鎌^(注14)が出土している。また天間林村森ヶ沢遺跡では、20基の土壇墓から、北大Ⅰ式、南小泉式と考えられる土師器・須恵器、刀子類を中心に剣や吊金具、鉈・環状鉄製品など多くの鉄製工具・武具が出土したとされる^(注15)。

一方、八戸市田向冷水遺跡において、当該期の集落跡が発見されている。住居跡の構造ならびに出土遺物からは、古墳文化の影響が考えられ、とくにカマドの構築は穀類を中心とする農耕社会の生活様式の流入と受容ととらえられる。北大Ⅰ式や南小泉式併行と考えられる土師器、玉類・黒曜石製石器等が出土しているが^(注16)、鉄器は鉄鏃数点のみであり^(注17)、土壇墓の副葬品内容とは質的な隔りがある。

当該期は土壇墓出土資料が中心であるが、古墳文化の流入を背景として前代に比して鉄器の種類が増えるとともに、一部黒曜石製石器の併用が残るとしても、工具のほか武具の鉄器化が着実に進行している様子が理解される。これらがもたらされたルートについては、後北C2-D式以降の北海道系土器の分布が、宮城県大崎平野まで拡大しかつ集中することを根拠に、同城が古墳文化圏との主要な交流帯となり、鉄器等入手の窓口となったとする説がある^(注18)。おそらくその役割は、律令期の城柵周辺域、平安後期の北奥地方へと引き継がれていくのであろう。

交流帯（境界域）をはさんで南北の文化圏が交錯する構図は、律令期以降も同様であるが、当該期もう一つの地域差が顕在化しはじめる。太平洋（陸奥）側と日本海（出羽）側といった東西間の相違である。南北の文化内容ほどには違いが目立たないものの、後北式以降の北海道系土器は陸奥側に偏

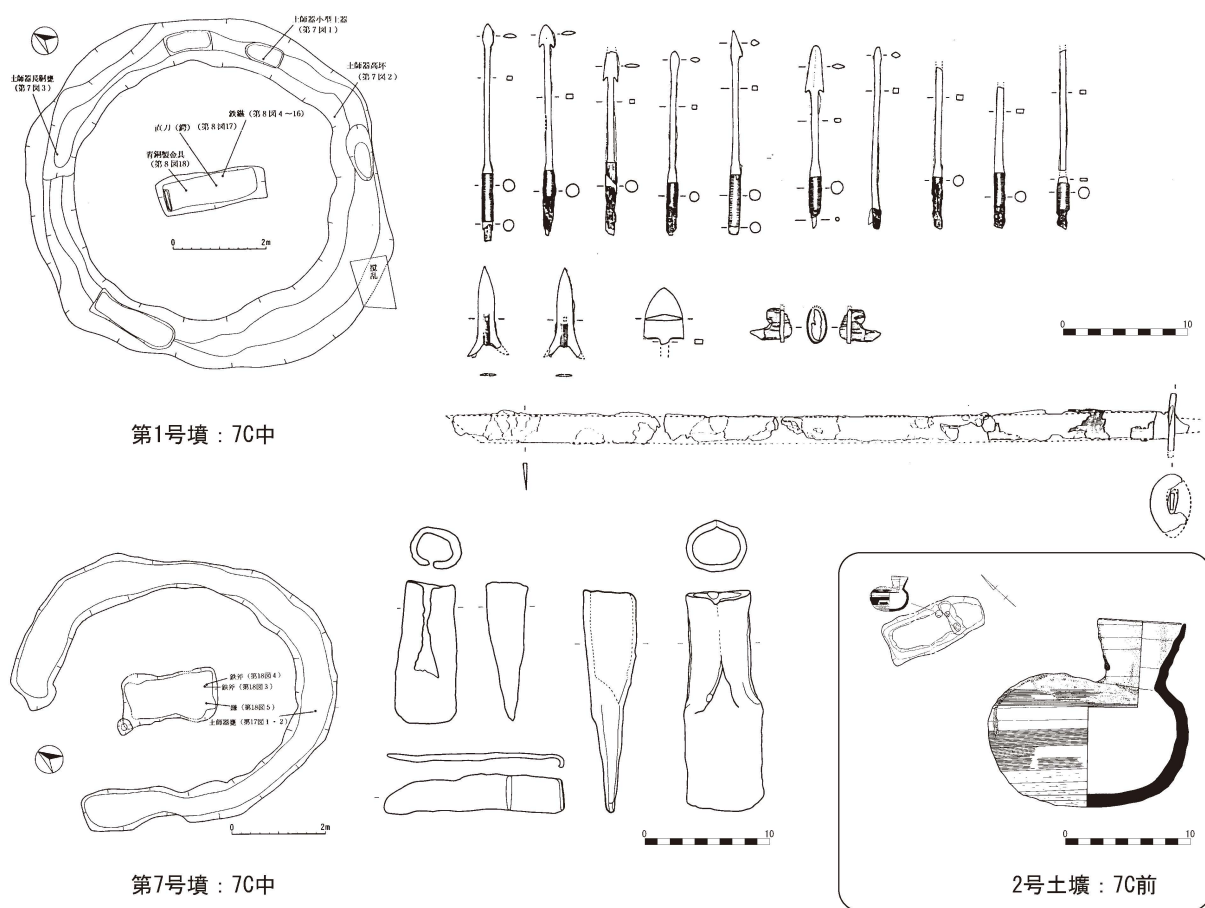


図1 阿光坊遺跡（下田町）

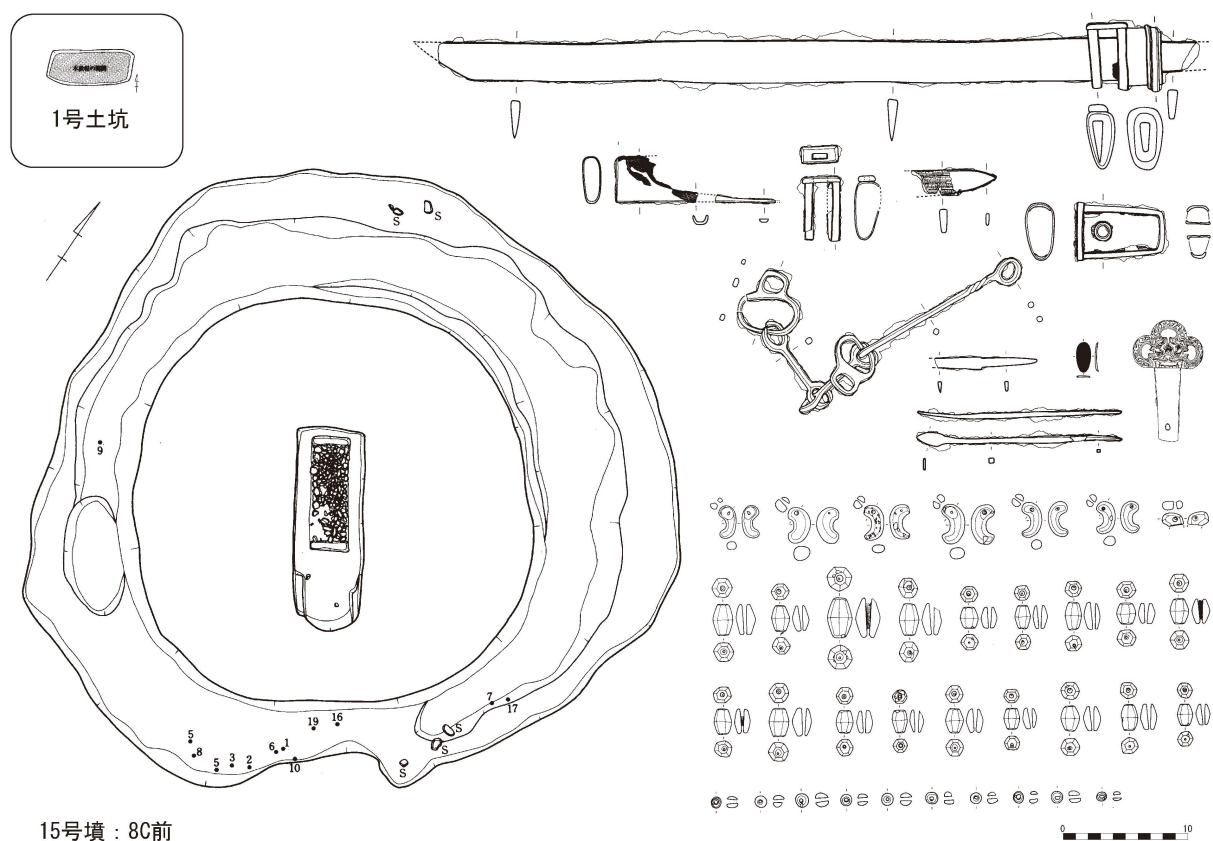


図2 丹後平古墳（八戸市）

在するとともに、鉄器の流通も太平洋側のルートが卓越している様子がうかがわれ、以降拡大する地域差の起点ととらえられるのである。

東西間の格差は、局地的な気候や地形等の違い、あるいは縄文時代以来培われてきた経済的な交流範囲や、技術・情報伝達の経路（物流ルート）の差異に基づく緩やかなものであって、移動性の高い狩猟採集生活から、土地を基盤とする農耕社会へと移行するに応じて固定化され、地域性として顕在化してきたものと考えられる。

飛鳥・奈良時代（7～8世紀）／普及期

文献史料においては、7世紀の大化改新前後、国家の政策として鉄生産技術が全国に移植され、地方における鉄生産が飛躍的に拡大するとともに、半島からの鉄輸入の記事が消滅し、列島における鉄生産が新たな段階に入ったことが推定されている（注19）。一方、鉄が北方世界との贈与や交易に利用されていたこと、あるいは北方世界が鍛冶などの加工技術を有していたこと等が、阿部比羅夫の北方遠征を記した「日本書紀」斉明天皇六年三月条ほかの記事から推察されている（注20）。

文献と符合するかのように、7世紀後葉頃には、福島県浜通地方北部に所在する武井・金沢地区製鉄遺跡群等で大規模な鉄生産が開始される。導入期の長方形箱形炉は、近江から東海・関東にかけての太平洋沿岸に分布する炉に類似することから、当該地方からの技術移転による官営的な操業が推定されている（注21・22）。

8世紀前葉には陸奥国に多賀城が設置され、律令国家による東北経営が本格化する。当該期、多賀城周辺の柏木遺跡では製鉄炉・炭窯・鍛冶炉などが一体となった鉄生産関連遺構が見つかった。炉の形態等からは北関東や福島県地方との関連が考察されており、同地方からの技術移入によって、国家の管理の下鉄生産が行われた可能性が高い（注23）。生産された鉄器類は、城柵ほか北奥地方の在地有力者層等へ供給されたと考えられている（注24）。

北奥地方、すなわち当該期頃から「蝦夷」と呼称された人々の住む地域においては、7世紀前後より陸奥を中心に新たな墓制「終末期古墳」が成立する。同遺構は、前代において北海道系土器が分布する地域において、比較的多く認められるようである。従来の土壙墓における刀子や農工具に加えて、新たに武具や馬具をはじめとする豊富な鉄製品が副葬され、階層化の進行に伴う首長権の拡大がうかがわれる。また鉄器を多量に補充できるという前提から、鉄器を介した律令国家との安定した関係も推測されるのである。

下田町阿光坊古墳群（注25）（図1）・八戸市丹後平古墳群（注26）（図2）を例にあげれば、鉄鏃・直刀・薙手刀等の武具・馬具類を副葬する一群、玉類や釧・耳環を豊富に副葬する一群、鉄斧・鎌等農工具を副葬する一群、殆ど副葬品の見られない周壕を持たない土壙墓群が認められ、かなり複雑な階層性社会の一端を垣間見ることができる。

終末期古墳から出土する代表的な鉄器である薙手刀は、東日本を中心に九州から北海道まで250点ほど出土しており、特に終末期古墳の多い岩手県・宮城県に集中的に見られる。古型式の多い信濃地方が起源と考えられており、東山道沿いに伝わってきたと考えられるが（図4）、鋒形状の違いに地域性が認められることから、少なくとも東北～北海道、関東～中部地方、西日本の地域ごとに製作されたと推測されている（注27）。青森県においても14振ほど知られているが、そのうち発掘調査で出土し

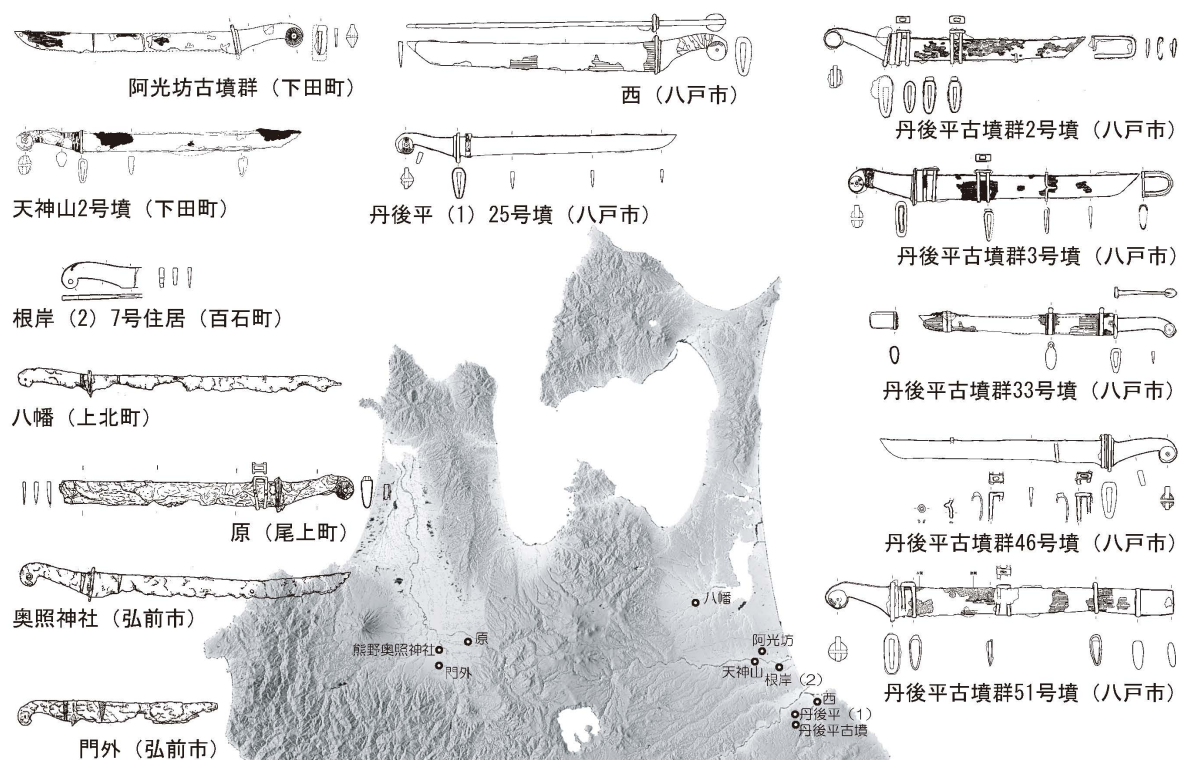


図3 青森県内における蕨手刀の出土分布

たものは八戸市丹後平古墳群5振^(注28)・丹後平 (1) 遺跡1振^(注29)・下田町天神山遺跡1振^(注30)・百石町根岸 (2) 遺跡1振^(注31)であり、いずれも8世紀代のものと推定されている (図3)。

また当該期の集落も、陸奥を中心に増加傾向となる。一般的な竪穴住居跡においては、武具・馬具の出土が少ないものの、工具・農具に関してはおおむね種類が出そろい、鉄器の普及と開拓の進展が表裏一体にあることをうかがわせる。ただし八戸市田面木平 (1) 遺跡^(注32) (図5) や下田町中野平遺跡^(注33) (図7) 等に見られるように、一部の竪穴住居跡群に集中遺存する傾向が把握される。そうした一部の住居からは馬具や蕨手刀、小札など特殊な遺物が出土する場合もみられ^(注34) (図6)、鉄器の集団共有が想定されるとともに、管理者と持たざる人々との階層差は、墓制にみられるのと同様首肯されるように考えられる。もう少し飛躍的に言えば集落内の階層的在り方が、墓制にも反映され、用途を問わず鉄器が象徴的な威信財としての役割を果たしているといえる。

一方出羽では8世紀前葉に出羽柵 (秋田城) が活動を始め、周辺域において若干の鉄生産関連遺跡が認められる^(注35)。秋田城以北では、秋田県鹿角周辺に8世紀代の集落・終末期古墳群が認められるが^(注36)、出羽全般に7～8世紀の集落は少なく、鉄器の出土量も寡少である。当該期の津軽地方では、津軽平野南部 (弘前～尾上付近) に集落が集中するほか、深浦町西浜折曾の関遺跡^(注37)、

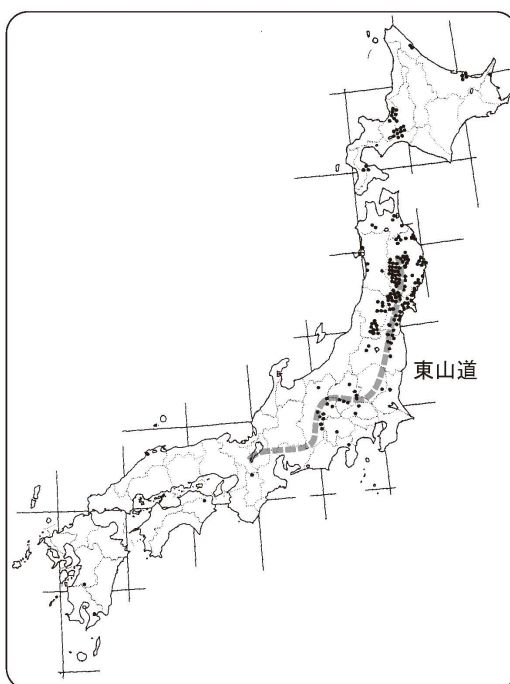


図4 蕨手刀出土分布図

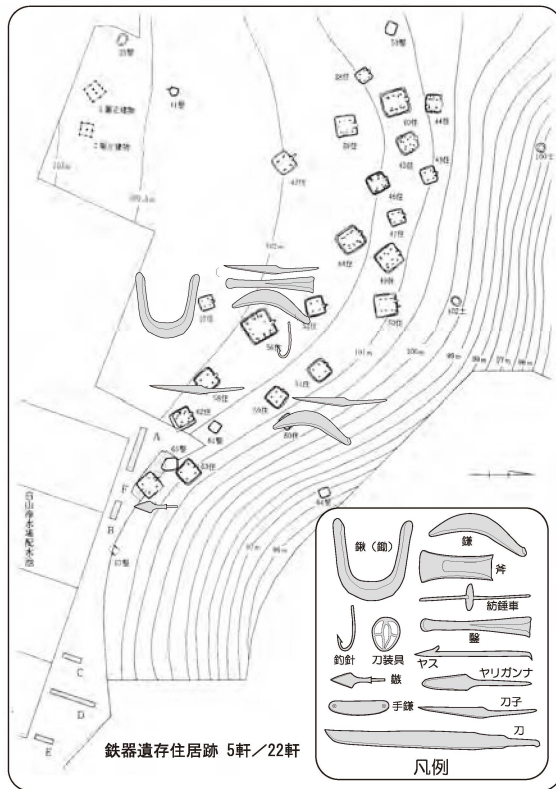


図5 田面木平 (1) 遺跡 (八戸市) : 7C中

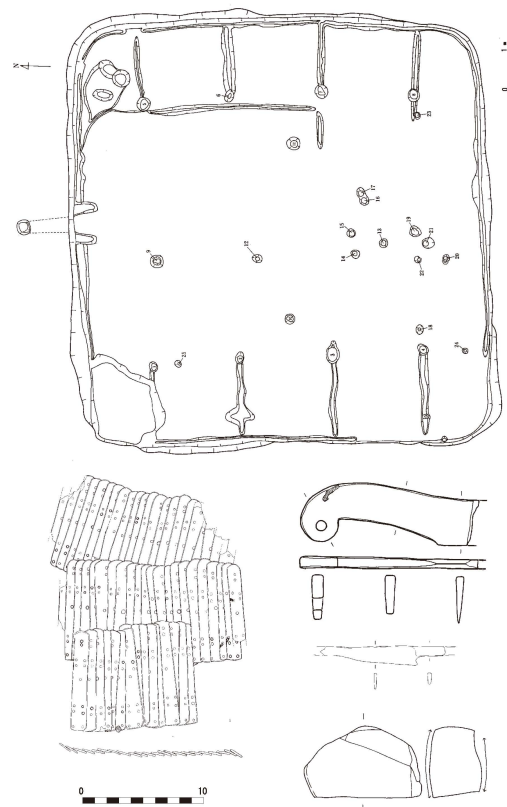
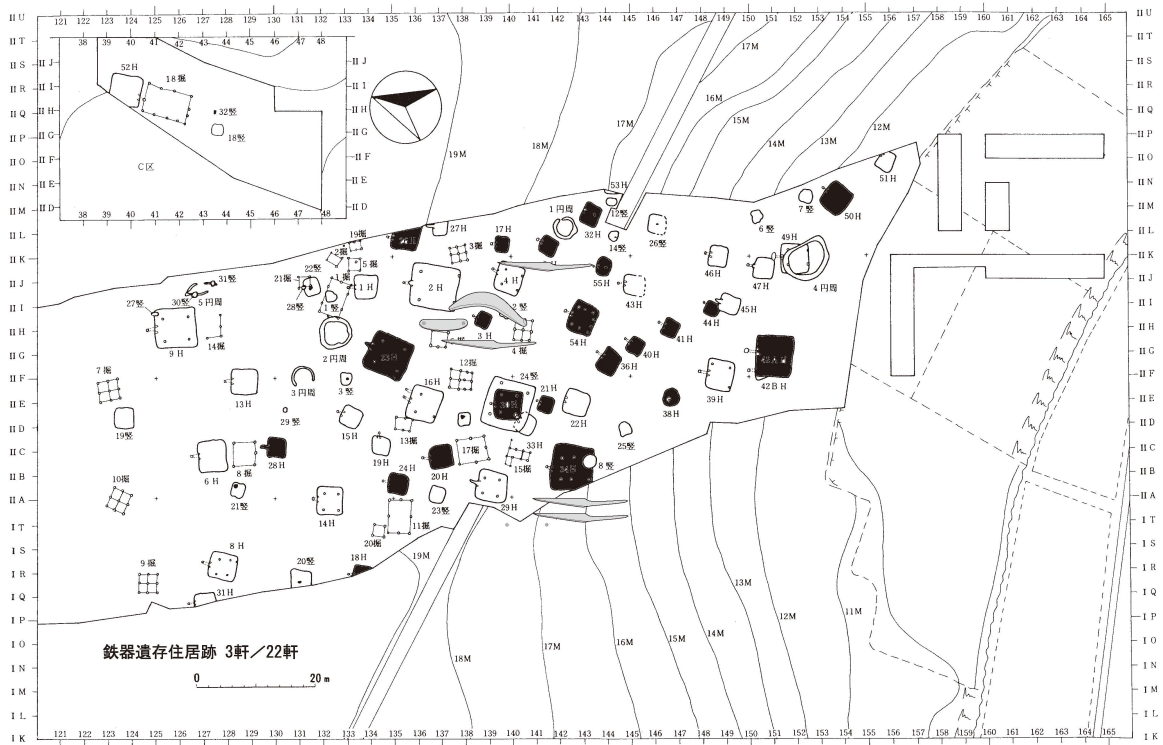
図6 根岸 (2) 遺跡 (百石町)
第7号竪穴住居跡: 8C後

図7 中野平遺跡 (下田町) : 8C後

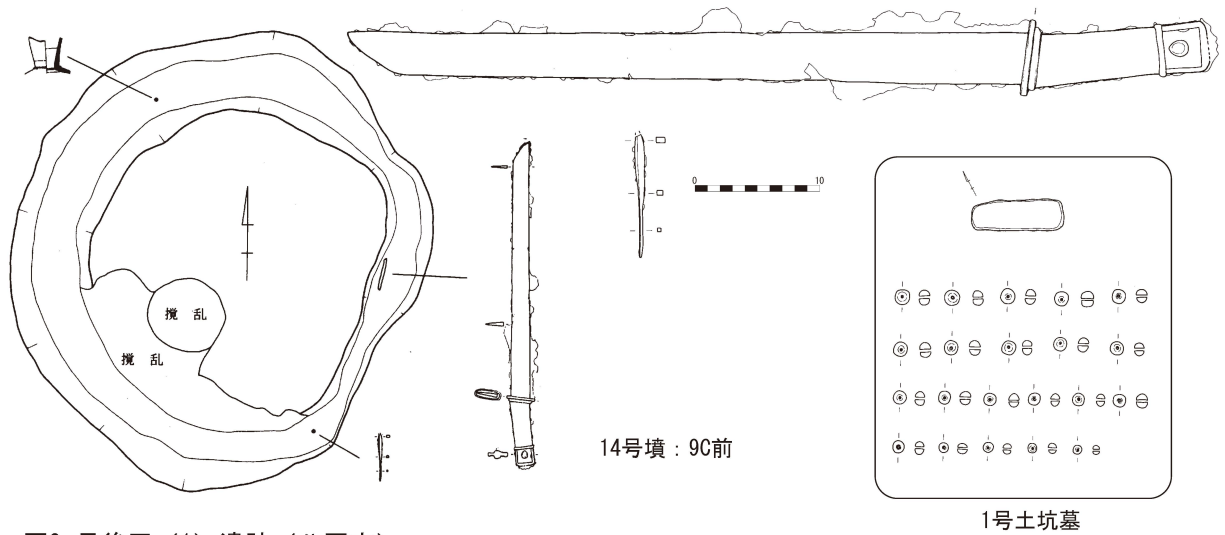


図9 丹後平（1）遺跡（八戸市）

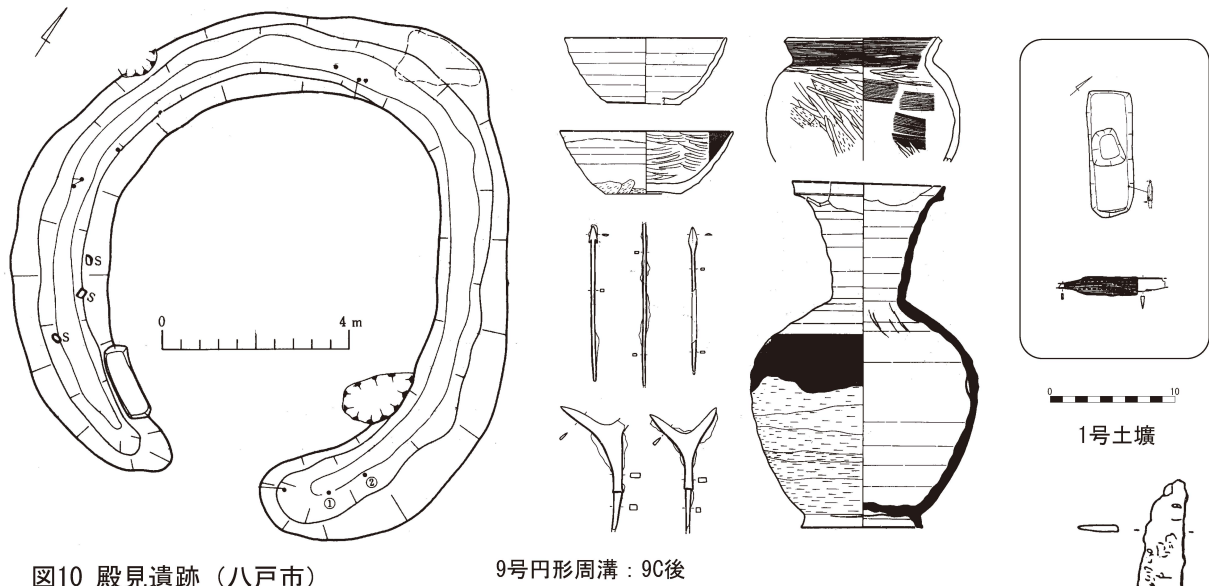


図10 殿見遺跡（八戸市）

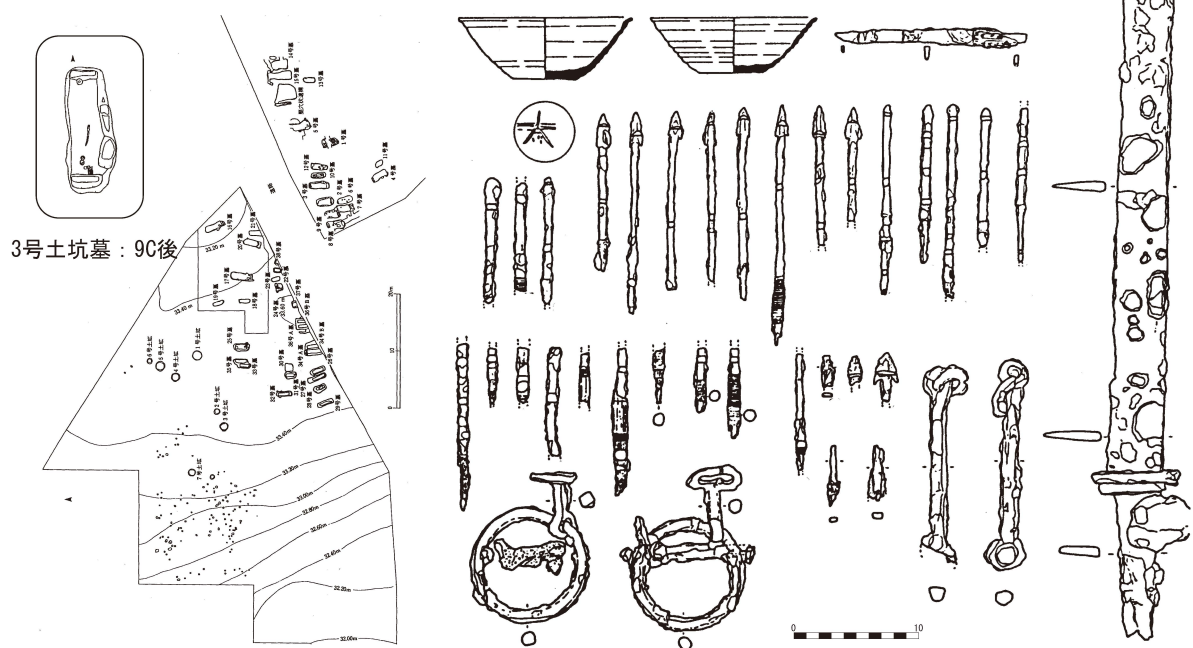


図11 湯ノ沢F遺跡（秋田県秋田市）

れており(注50)、当該期の鉄器普及の一端をうかがうことができる(図11)。陸奥とは異なり、多量の副葬品が特徴的であるが、同土壙墓群特有の現象であり、出羽における一般的な傾向とは考えにくい。

当該期は、対蝦夷戦争を経て律令支配が強まる時期であり、食器をはじめとする生活様式に各種の変化がもたらされる。鉄器については、秋田城・志波城等の城柵周辺において官炉的な工房が発見されているが、蝦夷の一般集落における状況は、調査例が少ないこともあって不明の部分が多い(注51)。あるいは、城柵側の鉄関連技術の管理が厳密であり、蝦夷側への流出が少なかった事実を示すものかもしれないが、基本的には前代同様の状況といえそうである。

平安時代中期(9世紀末～10世紀中葉)／変革期

9世紀後葉、北奥地方においては考古学上の大きな画期が訪れる。たとえば、秋田県内では、従来秋田城周辺に集中し、同城のコントロールの下操業されていたと考えられる鉄生産関連遺跡が、9世紀後葉を画期として、米代川下流域に出現するとされる(注52)。米代川下流域は一挙に集落が増え、たとえば能代市十二林遺跡など、製鉄炉・鍛冶遺構・炭窯・土師器焼成遺構・須恵器窯等が一体となった複合生産遺跡も見られるようになる(注53)。

津軽地方においても同様の状況であり、集落数の急増ならびに分布の拡大化が認められる。五所川原須恵器窯の操業や、本来は北海道系の土器様式である擦文土器が青森県内で散見されるようになるのも当該期頃からと考えられる(注54)。

これらの動態が、いかなる社会状況によってもたらされたのかは明らかではないが、文献等では、陸奥出羽両国において住民の多くが課役を忌避して「奥地」へ逃亡するという記事が9世紀中葉(承和年間)頃から、盛んに見えるようになるという。この場合の「奥地」の比定については、時空的な変化があるものの、郡制施行地から相対的に離れた地と理解されている(注55)。

さらに、9世紀後葉には、秋田城司の苛政に対して男鹿・能代・米代川流域等の村々が反乱(元慶の乱)を起こすが、その直後には「国内黎氓、苦来苛政、三分之一、逃入奥地。(「日本三大実録」元慶三年三月二日条)」の記事が見え、同乱の勃発前後には住民の三分の一に及ぶ多くの人々が「奥地」へ逃亡している状況が看取される。同記事は、元慶の乱収束後を受けて記録されたものであるから、この場合の「奥地」は米代川流域以北の津軽地方を含めた範囲を意味する可能性が高い。あるいは津軽地域において当該期に認められる集落の急増現象は、これらの混乱が波及した結果とも考えられる。また、米代川流域以北における須恵器窯や鉄生産関連遺構等の急増についても、原因を元慶の乱前後の律令国家側の懐柔策もしくは処理策に求める説がある(注56)。

当該期の集落跡においては、刀子を中心に鋤先・鎌・手鎌(注57)といった鉄製農具が普通に見られるとともに、紡錘車もほぼ鉄製に置換される(図12)。出土例は少ないものの、鉄鍋もこの頃から出現する。煮炊具として用いられたのか、鉄素材として搬入されたのかは判然としないが、当段階ではカマドと土師器甕・埵を用いた煮炊きが支配的であるため、後者の可能性が高いと思われる。

出土(遺存)パターンは、前代に引き続き特定の竪穴住居跡への集中化現象が見られる集落(図21・22)とともに、鉄器の遺存率が比較的高く、各竪穴住居から普遍的に出土する集落(図23・24)が認められる。なかでも南郷村砂子遺跡(注58)・八戸市風張(1)遺跡(注59)等、馬淵川流域における武具(鉄鏃)の遺存率の高さはきわめて特異な状況といえるが(図19)、武具のなかでも鉄鏃のみが突出し

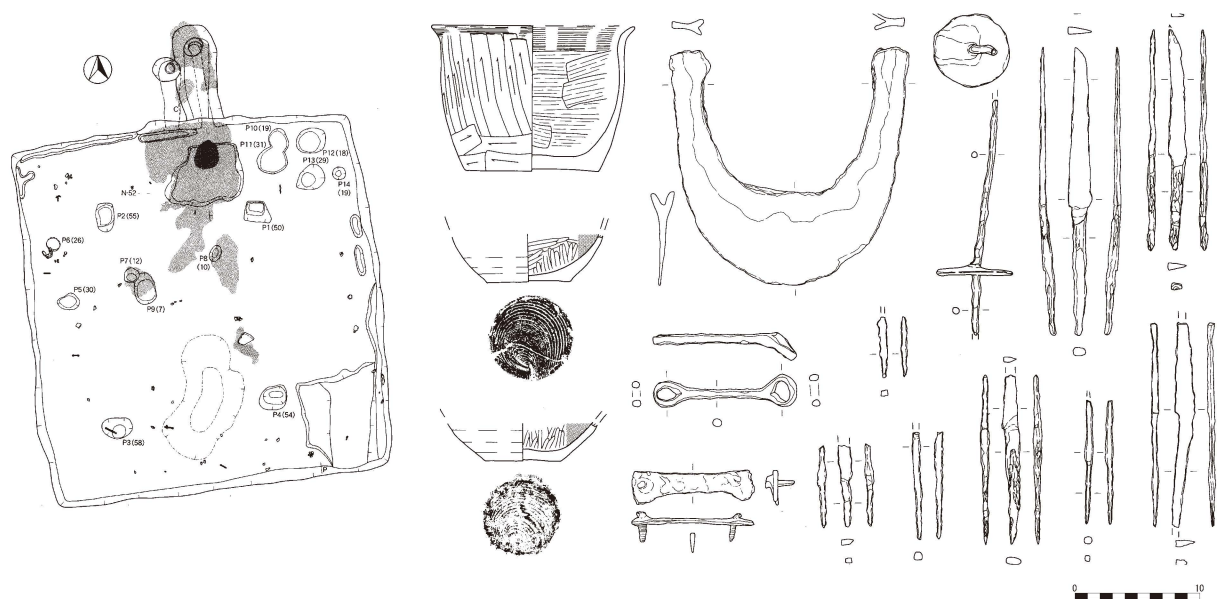


図12 岩ノ沢平遺跡（八戸市）／B-40号竪穴住居跡：10C前

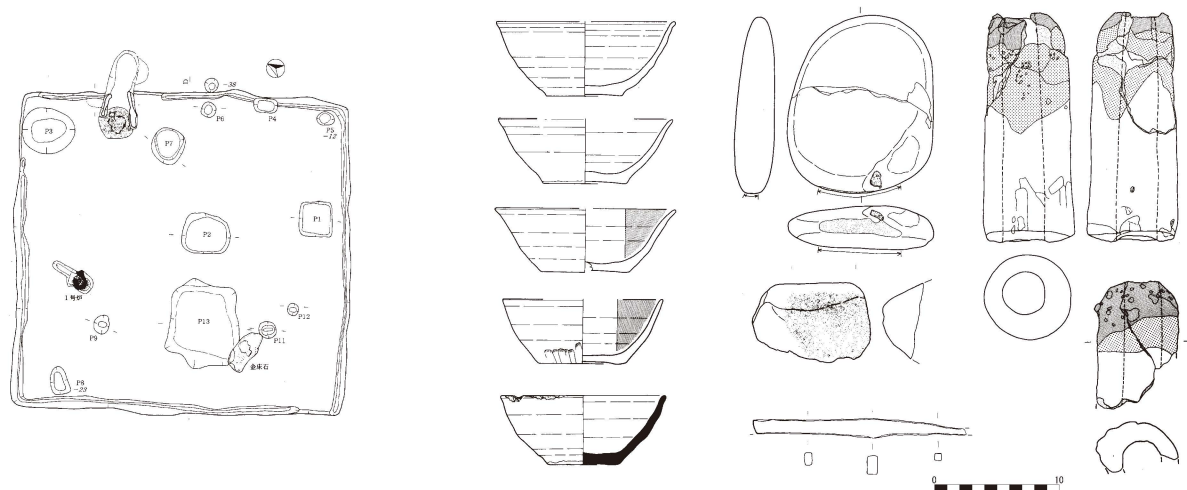


図13 安田（2）遺跡（青森市）／第1号鉄関連遺構：10C前

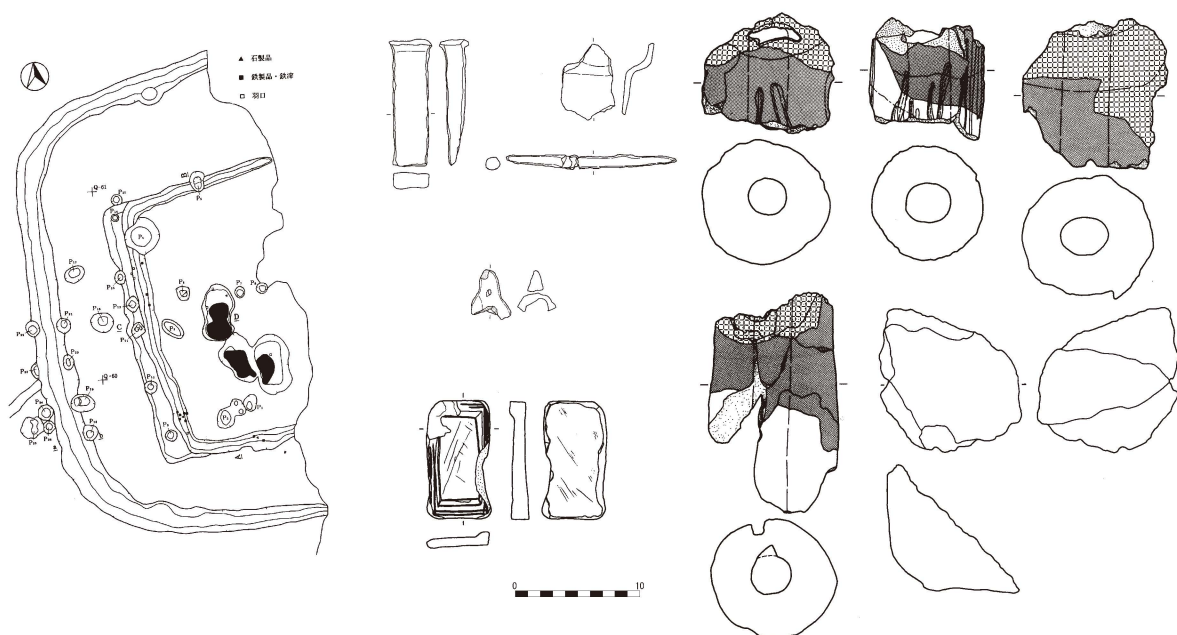


図14 山元（2）遺跡（浪岡町）／第1号鍛冶遺構：10C後

ているとともに、竪穴住居跡あたり1～2点の遺存にすぎないため、戦闘用ではなく狩猟用とする見解もある(注80)。

また当該期から八戸市岩ノ沢平遺跡(注81)・平賀町烏海山遺跡(注82)等、鑿・鉄鉗等の鍛冶具を出土する集落が現れるとともに、鍛冶遺構あるいは羽口・鉄滓・砥石等の関連遺物もこの頃から急増し(図13)、ほどなく「1集落1鍛冶遺構」といった状況となる。鉄器加工・生産の本格的な開始期と位置づけられるが、極短時間で一気に普及した要因としては、元々蝦夷社会に鍛冶技術や知識が潜在していた可能性が考えられる。同時に、当該期の鉄器需要を賄えるほど大量の鉄素材が存在したことが前提となり、そのためには鉄の生産ならびに流通体制の変革を想定せざるを得ない。

たとえば、馬淵川流域においては、この頃から鍛冶関連遺物の多い山間地の集落と、鉄器は多いものの鍛冶関連遺物が極端に少ない低・中位段丘平坦地の集落が見られるという(注83)。これらの現象も、鉄器需要の拡大に伴って、燃料の豊富な山間地に鉄器生産機能が分離移行した結果とも考えられ、鉄器遺存率の高い集落は、そうした職能的集落であった可能性もある。

一方津軽地方においては、鉄生産遺跡が、資源(砂鉄・粘土・木炭等)の豊富な八甲田山北西麓・梵珠山麓・岩木山北麓等に出現する(注84)。これらはいずれも当該期に集落が急増する地域と重なることから、急激な鉄需要に対応した地域内供給型の操業と考えられ、小規模な生産体制であるものの、専業化へ向けての胎動ととらえられる。また、当該域における鍛冶遺構・遺物には、土鈴・土玉や錫杖状鉄製品・蕨手状刀子等の特殊な遺物が伴う例が知られている(注85)。土鈴・錫杖状鉄製品は、ともに太平洋側を中心に出土することが知られており、前者は工人集団に関係する遺物(注86)、後者については神仏習合の要素をもった雑密系の祭祀具と推定されている(注87)。当該域における鍛冶技術の系譜や担った人々の信仰形態を考えるうえで興味深い現象である。

流通面においては、当該期から生産が始まる五所川原産須恵器が、北奥地方ならびに北海道全域に流通し、当初から広域流通を念頭に置いた操業形態であることが知られている(注88)。同時に陸奥湾周辺域において擦文土器の出土も目立ち始めることから(注89)、おそらくこの頃から陸奥湾・太平洋ルートを通じた交易体制に転機が訪れ、北海道への鉄素材・鉄器流入も本格化すると考えられる。

当該期は、9世紀後葉を画期とする急速な集落増ならびに各種生産活動の進展によって、鉄器需要が大幅に伸び、それに対処するための鉄生産・鍛冶技術の拡散拡大と、職能集団の顕在化、海峡交易の拡大等、各分野の変革が相乗的に進行した時期と位置づけられる。

平安時代後期(10世紀後葉～11世紀中葉)／発展期

10世紀後葉、北奥地方においては再び大きな画期を迎える。指標の一つは、集落立地ならびに形態・構造の変化である。前代集落の大半は、当段階に継承されることなく廃絶し、丘陵や台地などに立地する集落が継続、もしくは新たに出現する。したがって、前代の集落が集中する三八・上北地方ならびに東青・中弘南黒地方においては、集落が急激に減少するよう見える。一方、前代から新たに集落が形成される津軽半島や西海岸部においても、集落立地は高位段丘面や丘陵が主流となり、前代の主体であった沖積地に接する低位段丘集落は限定的となる。そして殆どの集落は、壕や柵を巡らした区画集落へと移行する。区画集落の出現については、前代からの急速な経済発展に伴って生じた土地や水利・交易を巡る争いなど、地域間(集落共同体)相互の利害関係が想定され、その過程には集落

の統合組織化・序列化の進行が看取される(注70)。

二つ目の指標は、土器様式の変化である。須恵器や土師器は減少傾向となり、律令期以来続いた食器様式は終焉を迎える。食膳具が木器に置換される一方、小皿・小壺ほか、把手付土器・内耳土器・羽釜等当該域特有の器形が新たに組成に加わる。限定的ながら、煮炊具として鉄鍋・内耳鉄鍋が導入されるのもこの頃からと考えられる。

もう一つの指標は、津軽海峡交易を軸とした交易圏の顕在化である。当該期から急激に出土量が増える擦文土器の出土状況からは、陸奥湾沿岸域・岩木川流域・馬淵川流域の三地域に大別され、それらは海峡を越えた北海道との経済交流の差異に由来するものと考えられる。すなわち、太平洋・陸奥湾ルートを通じて道央部と連携する陸奥湾沿岸域、日本海・岩木川ルートを通じて道南部と結びつく岩木川流域、北海道との交流の痕跡が目立たない馬淵川流域となる(注71) (図15)。

前代よりいち早く活性化し始めた陸奥湾・太平洋ルートに対し、当該期からは岩木川・日本海ルートが隆盛となることが推定される(注72)。鉄素材や鉄器もこれらのルートを通じて、北海道へもたらされたものと考えられるが、鉄器の微量元素分析によれば、時期・地域によって鉄素材の組成が変化するとともに、北海道・津軽地域の組成比はほぼ一致、県南地方は異なるという(注73)。これらの考察は、時期・地域によって原料鉄の流通ルートが異なることを示しているとともに、当該期における北海道の鉄器流入に関しては、津軽地方が大きく関与していることをうかがわせる。

鉄生産遺跡は、従来の米代川下流域や八甲田山麓に代わって、主として米代川中～上流域・岩木山麓において集中的に見られるようになる。いずれも従来の集落内経営とは規模・供給範囲の異なる集中・専門的な経営であり、日本海交易を前提とした北方への広域流通を目指したものと考えられる。それらの経営主体については、在地勢力もしくは国家側の積極的な関わりが考えられるが、当該期における経済活動の活性化、区画集落発生に見られる地域統合への動き、政治段階からすれば、前者としても格別奇ではない。

なお、区画集落を主とする当該期の集落からは、自給的とするにはあまりにも多量の羽口・鉄滓等が出土するとともに(注74)、複数の精錬遺構・鍛冶遺構が認められることから、専門的な鉄生産とは異なる形態の精錬・鍛冶一貫による鉄器生産が行われ、集落外へ供給されたものと考えられる。

当該期の鍛冶作業は、竪穴住居内の鍛冶炉において行われる例や(図17)、専用の工房で行う例(図14)が認められる。いずれも、円形もしくは楕円形状の火窟炉であり、棒状鉄器や鉄鍋等の既存鉄片を利用して、鉄器の生産・加工を行って

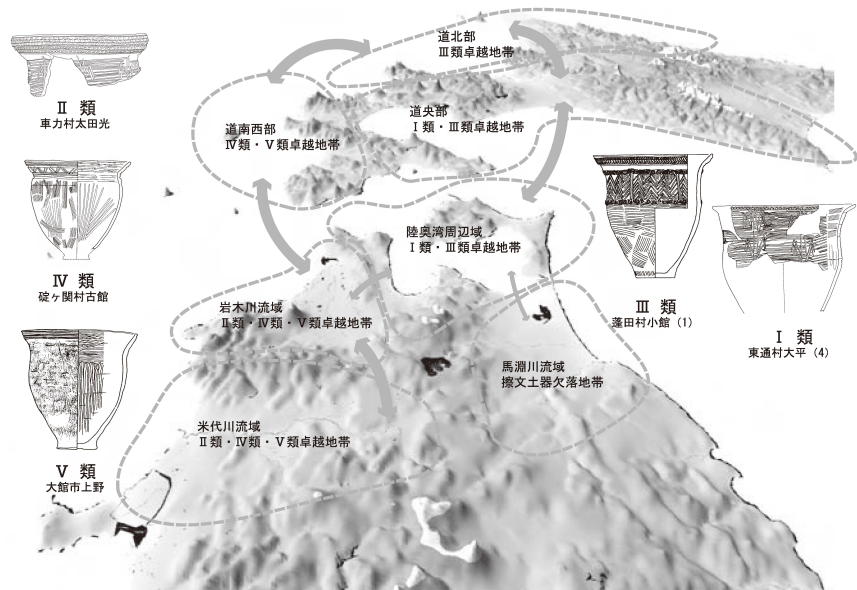


図15 古代の交易模式図(10世紀後葉～11世紀)

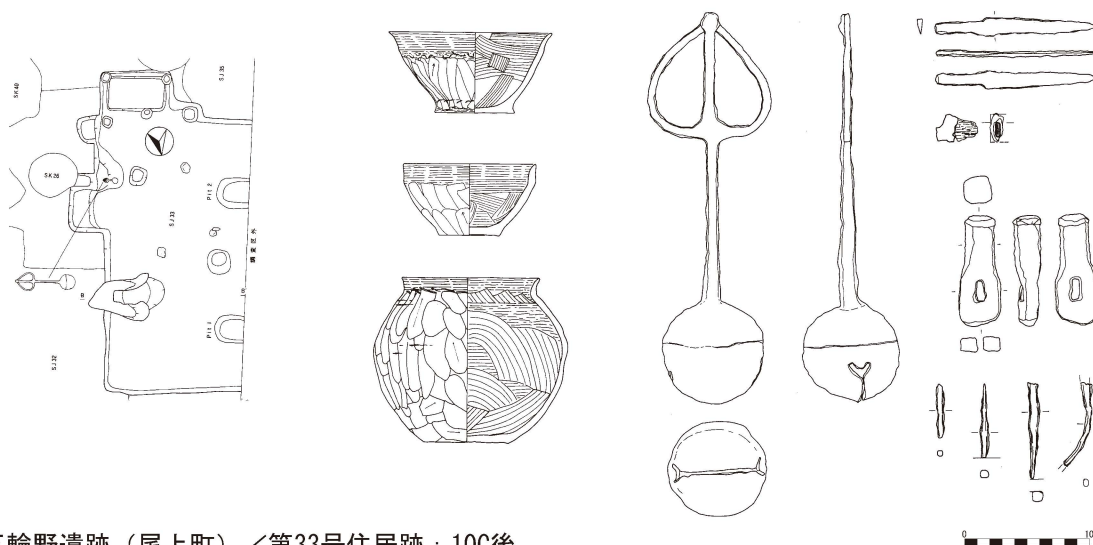


図16 五輪野遺跡（尾上町）／第33号住居跡：10C後

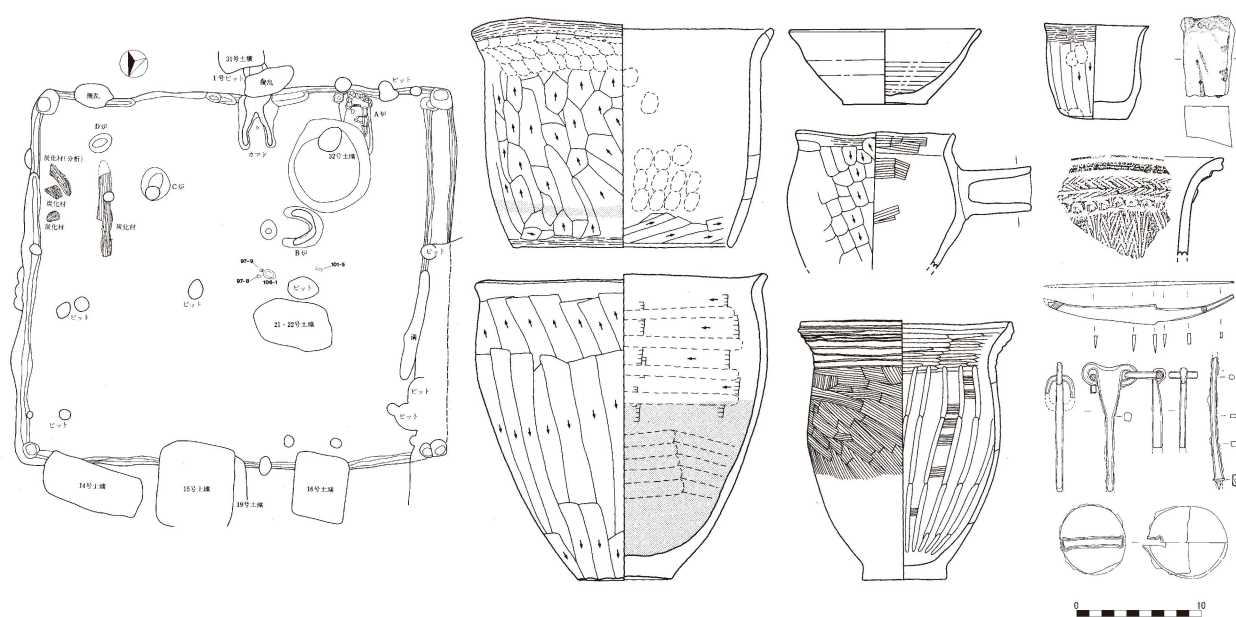


図17 蓬田大館遺跡（蓬田村）／14号住居址：10C末～11C初

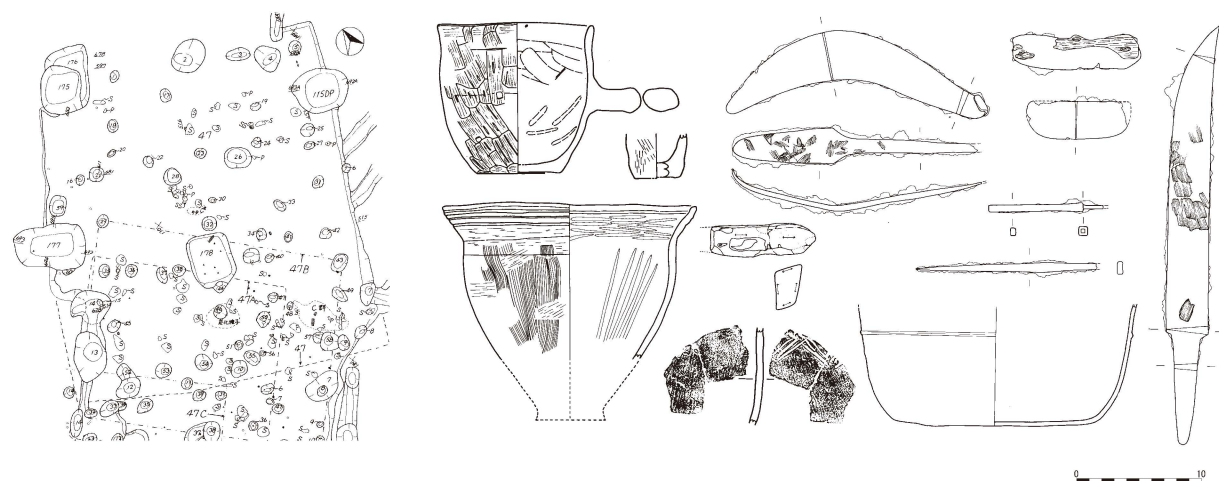


図18 古館遺跡（碓ヶ関村）／第47号跡：11C前～

いたと考えられる。鍛冶作業に伴う祭祀具は、土鈴が急減し、鉄鈴・錫杖状鉄製品・蕨手状刀子等が卓越する(図16・17・表1)。また、集落出土の鉄器は、刀子・農具に加え、斧・鉋・鑿等の工具が一定量見られるようになる(図18)。

当該期は、前代の変革から約一世紀を経て、拡大の一途をたどった各種生産が、集落内消費を上回り、集落外・圏外へ輸出された時期である。その波は、効率を求めて次第に分業化・専門化へと向かうとともに、生産・流通手段の拡大は、地域間の対立を招き、区画集落を生じせしめたと考えられる。生活様式も、北奥地方特有のものへと変容する。経済発展を背景として、北奥地方社会が相対的な自立と新たな政治段階へ進みつつある様子が看取されるのである。それらの流れの中から地域豪族層が台頭し、やがて広域を統べる統一勢力の誕生によって区画集落は役割を終えと考えられる。

遺跡	市町村	土鈴	鉄鈴	錫杖・鉄錐	蕨手刀子	時期
新町野	青森市	○				9C後～10C前
野尻(1)	浪岡町	○				9C後～10C前
隠川(2)	五所川原市	○				9C後～10C前
隠川(4)	五所川原市	○				9C後～10C前
隠川(12)	五所川原市	○				9C後～10C前
山元(2)	浪岡町	○				9C後～10C前
野尻(2)	浪岡町	○				9C後～10C前
島海山	平賀町	○				9C後～10C前
砂子	南郷村	○				9C後～10C前
羽黒平(1)	浪岡町	○	○			9C後～10C前
野尻(4)	浪岡町	○		○		9C後～10C前
弥栄平(4)	六ヶ所村			○		9C後～10C前
貝ノ口	七戸町			○		9C後～10C前
朝日山(2)	青森市			○		9C後～10C前
松元	浪岡町			○		9C後～10C前
山元(3)	浪岡町			○		9C後～10C前
野木	青森市			○	○	9C後～10C前
松山	浪岡町				○	9C後～10C前
神明町	金木町				○	9C後～10C前
岩ノ尻平	八戸市	○				9C後～10C中
上七崎	八戸市			○		10C前～中
風張(1)	八戸市			○		10C前～後
富永	銭田町		○			10C前～後
高屋敷館	浪岡町	○		○		10C後～11C
種里城跡	郷ヶ沢町	○		○	○	10C後～11C
宮館	弘前市	○				10C後～11C
熊野堂	浪岡町			○		10C後～11C
五輪野	尾上町		○	○	○	10C後～11C
砂沢平	大鰐町		○	○		10C後～11C
蓬田大館	浪岡町		○	○		10C後～11C
源常平	浪岡町			○	○	10C後～11C
大光寺新城跡	平賀町			○		10C後～11C
中里城跡	中里町			○		10C後～11C
高館(1)	黒石市		○			10C後～11C
前川	田舎館村				○	10C後～11C
古館	碓ヶ関村		○		○	10C後～11C

表1 祭祀具出土状況

平安時代末期(11世紀後葉～12世紀)以降／新段階

続く11世紀後葉～12世紀代は、列島規模で政治的な再編が進行する時期である。自立性を高めつつあった北奥地方にあっても、前九年後三年の役を経て、朝廷の支配下におかれることとなる。実質的な支配者奥州藤原氏の下、津軽地域の建郡と陸奥国編入が行われ、新たな段階へと移行する。

この間に区画集落ならびに、土師器・擦文土器ほか前代までの土器様式がほぼ姿を消し、遺構・遺物ともに一気に減少する。背景には社会構造の変化、遺跡の立地変化、食器の木器・鉄器への完全置換、建物構造の変化等が潜在すると考えられ、大きな画期を想定すること可能である。

したがって、鉄・鉄器生産、集落内における鉄器使状況も考古学的には把握できない状況であるが、前代までの鉄器生産の専門化・広域流通化への流れから推察するならば、小規模な鉄生産は衰退し、より大規模な鉄生産地に集約される一方、鉄素材・鉄器の交易は量・質ともに拡大するものと考えられる。

遺存鉄器からみた北奥社会(まとめに代えて)

①鉄器組成^(注75)ならびに遺存率の変遷(図19・20)

北奥地方における鉄器の本格的な導入は古墳時代と考えられるが、集落における利用状況は明らかではない。一般集落において、鉄器がある程度出土(遺存)し、導入期と目されるのは7世紀前後と考えられる。汎用工具である刀子を主体に、絶対量は少ないものの鎌・鍬(鋤)先等の農具が伴う。刀剣類・馬具等の出土は少なく、殆どは終末期古墳等の副葬品として見られるのみである。

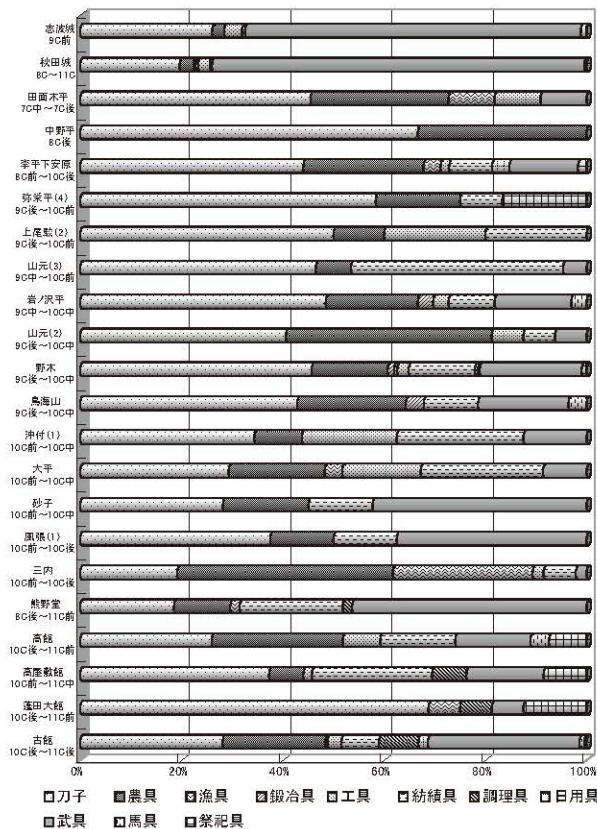


図19 鉄器遺存比率

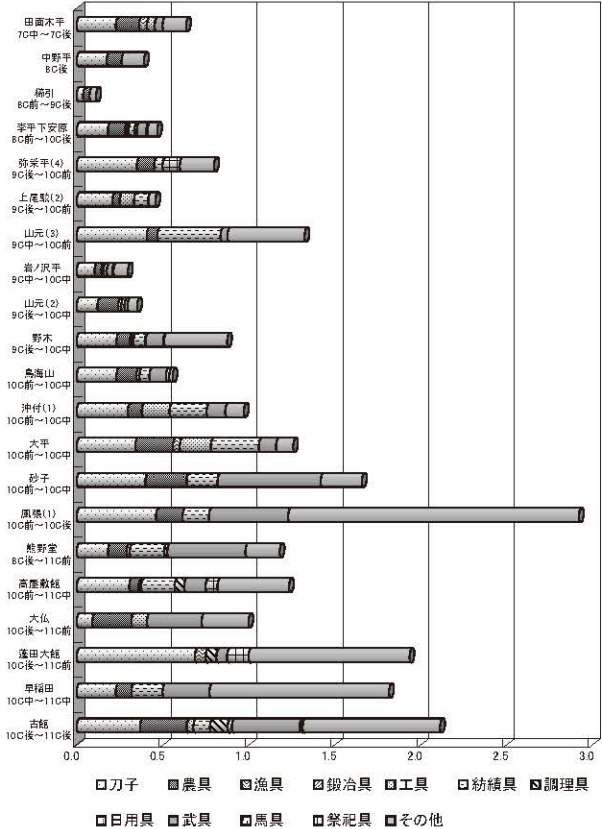


図20 竪穴住居跡1軒あたりの鉄器遺存数

集落全体の遺存点数そのものは少なく、竪穴住居跡1軒あたりの遺存数量は0.2～0.6、遺跡毎の偏差が大きいものの数軒から5軒に1点程度の割合に過ぎない。あくまで遺存した鉄器に基づくデータであり、実態を表すものではないが、未だ稀少性の高い性格が読みとれよう。

そうした一般的状況において、特定の竪穴住居跡への鉄器集中遺存現象が見られるとともに、小札・蕨手刀等が出土した百石町根岸(2)遺跡第7号住居(注76)のように、量的な集中に加えて、質的にも他から隔絶している例が認められる。おそらく、鉄器が威信財としての役割を果たしていると考えられ、多量の副葬品がみられる終末期古墳の成立と併せて、首長権の確立並びに階層差の拡大という背景が理解されるのである。

9世紀後葉以降の変革期においては、一気に鉄器の生産・加工技術が普及する。農具の出土が一般的となるとともに、鉄製紡錘車への置換が進行する。また少ないながらも鉄鍋・直刀等の武器・馬具・工具・鍛冶具・宗教具等様々な鉄器が見られるようになる。

各集落の、竪穴住居跡1軒あたりの遺存数量は0.4～1.2、相変わらず遺跡毎の偏差が大きいものの、数値的には倍増している。特定の竪穴住居跡への集中遺存傾向は、当該期においても継続して見られるが、鉄器の普及により、前代よりも階層差が反映されにくい状況である。一方、当該期から大鰐町大平遺跡(注77)や南郷村砂子遺跡(注78)のように、竪穴住居跡1軒あたりの遺存数量が1.5～3.0に及ぶ、遺存率の極端に高い集落が出現する。前者は当該期から明確化してくる職能的(工人)集落、後者は突出した鉄鑛の遺存に表徴される馬淵川流域の特性として理解される。

10世紀後葉以降の発展期においては、当該期に出現する内耳鉄鍋ほかの調理具、鉄鑛に代表される武器、工具、祭祀具の定量存在に特徴づけられる。また、「その他」とした用途を確定できない多種

多様な鉄器が多量に出土するのも当該期の一般的傾向である。これらの鉄器が遺存率を押し上げた結果、竪穴住居跡1軒あたりの遺存数量は1.0～2.0となり、前代に比してさらに倍増する。鉄・鉄器生産がピークを迎え、低価格の鉄器が多量に流通した結果と考えられる。遺跡毎の偏差も小さく、ようやく鉄器が一般化した時期と評価される。

集落単位の遺存鉄器の組成・数量の検討からは、上記のような鉄器普及ならびに位置づけの推移を想定することが可能である。画期は7世紀前後、9世紀後葉、10世紀後葉、12世紀初頭に求められ、他の考古学的知見から得られる画期と略一致することが判明している。

②集落内の鉄器遺存状況

上記において、北奥地方における鉄器の出現から普及発展までを、各期集落の遺存率で概観した。一方、集落内における遺構単位の遺存状況については、どのような傾向がうかがわれるであろうか。本項では、六ヶ所村沖附（I）遺跡^(注79)、大鰐町大平遺跡^(注80)を例に挙げ、遺存鉄器から類推される竪穴住居跡間の諸関係について、些かの試案を述べるものである。

沖附（I）遺跡

沖附（I）遺跡は、尾駸沼南岸の段丘上（標高約60m）に立地する。灰釉陶器をはじめとする出土遺物の特徴から10世紀前葉から中葉にかけての集落遺跡と考えられる。3つの調査区から全く重複のない状態で37軒の竪穴住居跡が検出されており、Ⅰ～Ⅲ期の変遷とともにカマド構造の類似する竪穴住居跡同士が集中的な配置を呈することが知られている^(注81)。

カマド構造の違いに基づく竪穴住居群の集中領域は、各期とも4～5単位認められ、単位毎に移転を繰り返している様子が看取される（図21）。基本的に1～2軒の中・大型住居と、1～3軒の小型住居から構成される各領域には、それぞれ鉄器の集中遺存住居が存在するが、前者の住居跡に遺存される例が多いようである。

以上のように、当該集落は、複数の竪穴住居群から構成される領域の集合体としてとらえられる。現在のところ、当該領域の性格に言及できる材料は見あたらないが、あえて仮定するのであれば主屋（母屋：主世帯）ならびに副屋（離れ：支世帯）・倉庫・工房等諸施設から構成される「家」空間もしくは世帯共同体ととらえることができるかもしれない。その場合、鉄器は各「家」共同所有であり、主屋において集中管理されることが多いと解釈される。

大平遺跡

大平遺跡は、平川上流の右岸段丘上（標高約135m）に立地し、平野部との比高差は約60m ある。出土遺物の特徴から、やはり10世紀前葉から中葉にかけての集落遺跡と考えられ、ほぼ重複のない状態で50軒の竪穴住居跡が検出された。そのうち17軒が焼失家屋であり、うち3軒から12点の木器荒型が出土している。また、先述したように工具を中心に鉄器遺存率が高く、職能集落としての性格が推定される遺跡である。

当該住居群を、土師器口クロ調整甕・持子沢系須恵器坏・長頸壺が出土するⅠ群ならびに、土師器ケズリ調整甕を主体とするⅡ群に大別すると、等高線に平行するように複数の竪穴住居群集中領域の

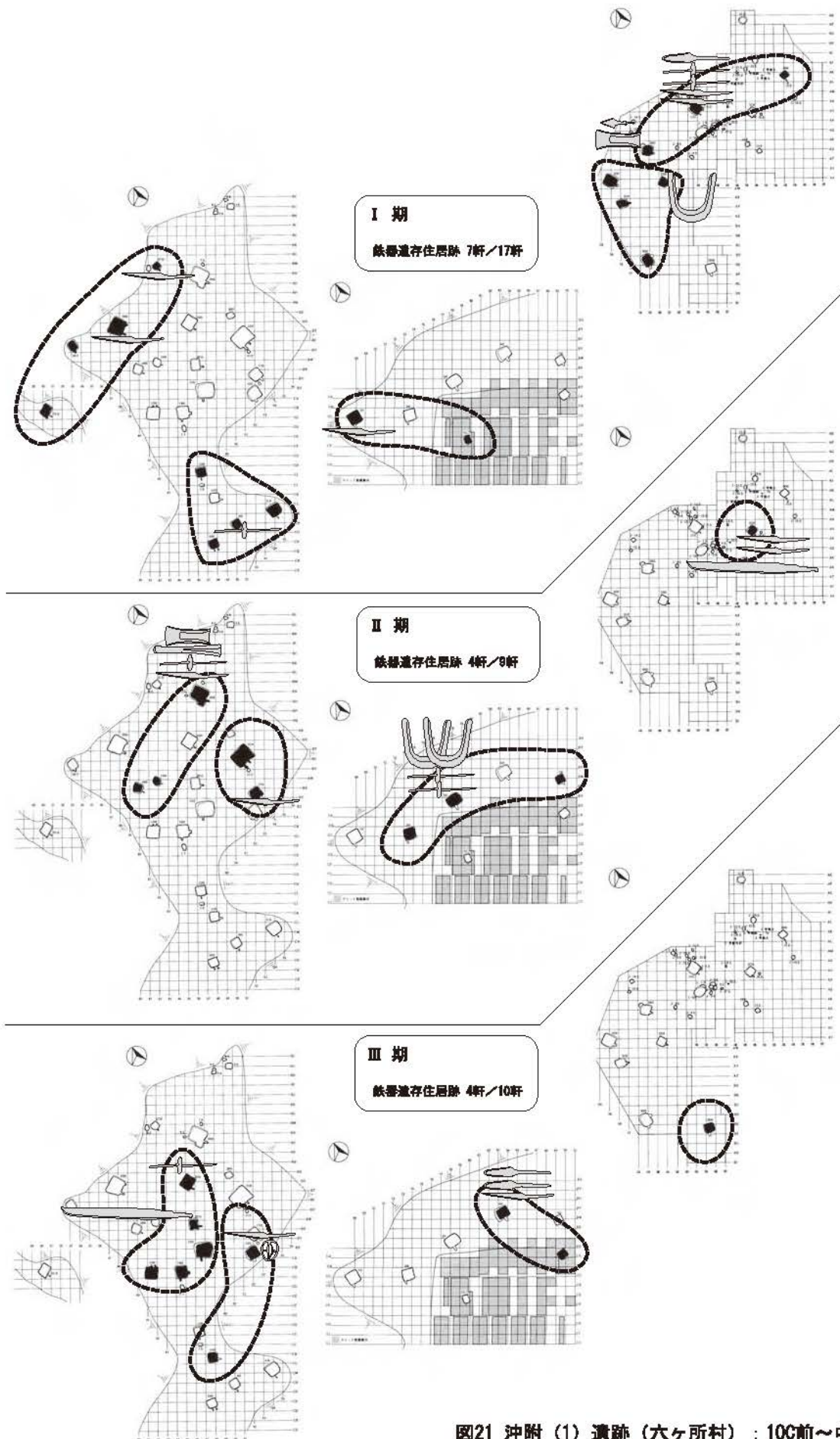


図21 沖附(1)遺跡(六ヶ所村): 10C前~中

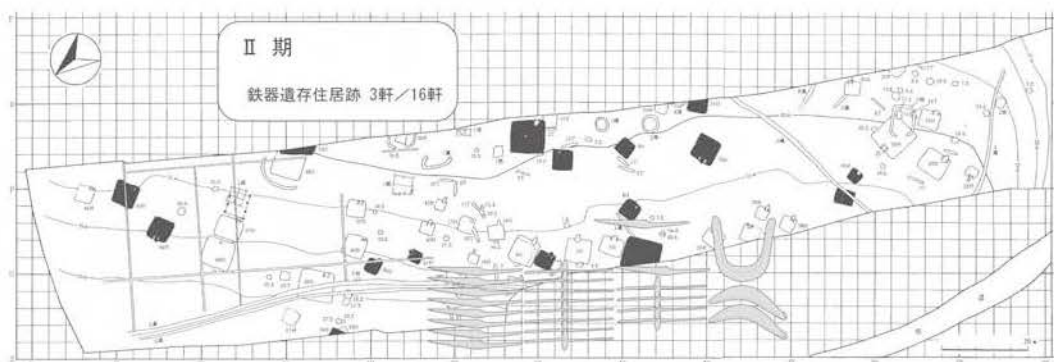


図22 山元(3)遺跡(浪岡町): 10C前

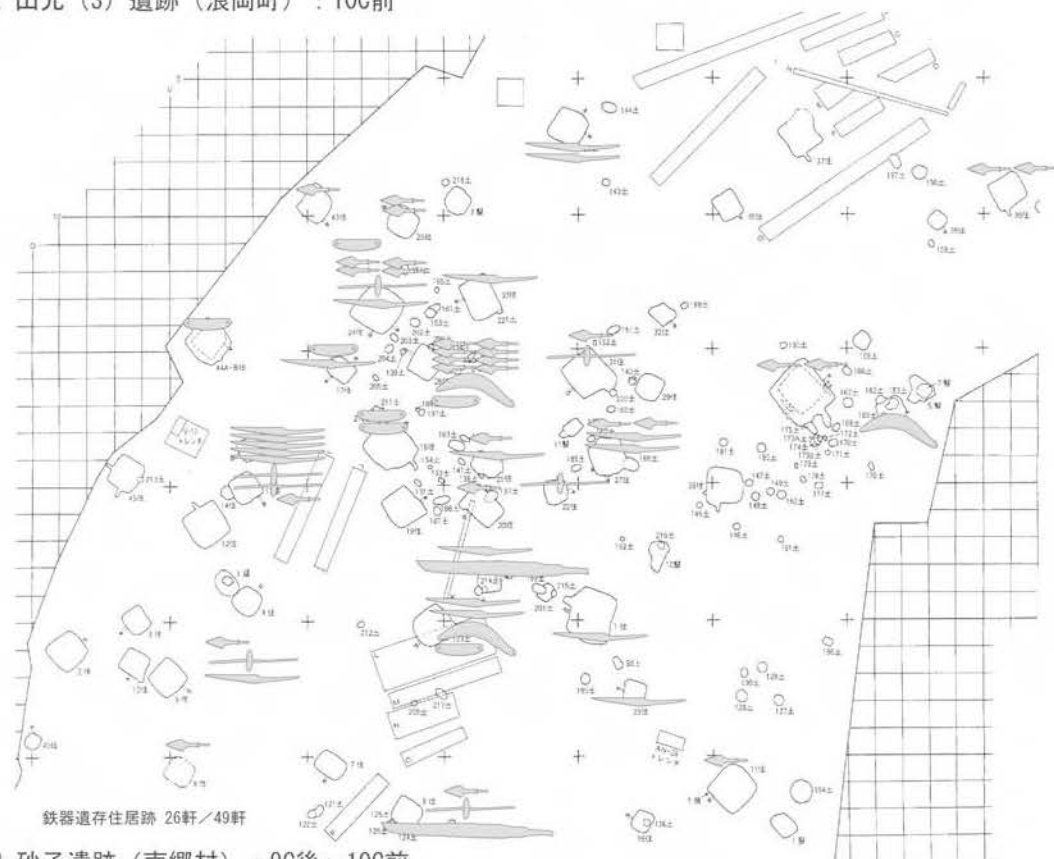


図23 砂子遺跡(南郷村): 9C後~10C前



図24 大平遺跡(大鰐町): 10C前~中

存在が認められる(図24)。Ⅰ群・Ⅱ群領域は相互に隣接するとともに、各領域は沖附(Ⅰ)遺跡同様、1~2軒の中・大型住居と、1~4軒の小型住居から構成され、それぞれ鉄器集中遺存住居跡が認められる。Ⅰ群領域は、刀子・紡錘車が集中、またⅡ群領域においては5点以上の鉄器や斧・鑿等の工具が遺存する住居跡・石組カマドを有する住居跡・焼失家屋等が集中し、住居構造ならびに遺存鉄器の質の違いが認められる。

Ⅰ群とⅡ群領域の性格については、時期差とも考えられるが、遺存鉄器の質の違いに着目するならば、機能空間の相違と推定される。当該集落は、中央部の領域から手斧・鑿成形による木器荒型が多数出土していることから、木器生産過程の荒型成形作業を担った木地師集落とも推定されている(注82)。対応する成形工具が、他のⅡ群領域に集中遺存することから、同領域は工人の作業領域と推定されるとともに、集落内における分業体制が存在し、Ⅱ群各領域は作業内容に対応した存在と看取される。一方、紡績具が卓越するⅠ群領域は、工人と配偶者・家族の居住領域と考えられ、当該集落の在り方は木器製作作業の各段階に応じて、作業領域と居住領域がセットとなっていることを示すものと推察される。

以上2遺跡について、鉄器の遺存状況から、集落内構造について簡単な考察を試みた。両遺跡とも複数の竪穴住居群から構成される領域が想定され、沖附(Ⅰ)遺跡にあつては「家」領域、大平遺跡にあつては作業領域と居住領域ととらえた。いずれの場合も、律令期の馬淵川流域のような階層差と求心力を見出すのは困難であるが、それらの集落間における構造の違いが、時期差もしくは地域差・集団差に基づくものなのかは現状ではわからない。今後の多様な集落の類例と分析が必要であるが、その際に遺存鉄器が些かの示唆を与えることは間違いない。

注

- 1 AMS法年代を巡る、近年の弥生時代の始まりに関する議論のなかで、鉄器の年代観が焦点のひとつとなっている。とくに導入期の鉄器の解釈については賛否両論の齟齬が大きい部分である(「特集 弥生開始年代」『考古学ジャーナル』510)。
- 2 本稿では、おおむね北緯40°以北の、青森県全域ならびに秋田・岩手両県北地域、いわゆる円筒土器文化圏の本州側地域を指す。
- 3 橘 善光ほか 1974「青森県大間貝塚調査概報」『考古学ジャーナル』99
- 4 青森県教育委員会 1995『板子塚遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
- 5 鈴木 信 2002「北海道における道具の鉄器化の進展-論旨-」第30回古代史セミナー 東京 グループα「古代国家と周辺世界」資料
- 6 青野友哉 1999「大洞~恵山式土器の墓と副葬品 -研究成果と今後の課題-」『日本考古学協会1999年度釧路大会 海峡と北の考古学 -シンポジウム・テーマ2・3資料集Ⅱ-』
- 7 木村 高氏は、石鏃の形態分析等から、質量ともに第8号土壙墓の特殊性を導き、階層差を表徴するものとしている。木村 高 1997「弥生時代・続縄文文化の墓 -板子塚遺跡土壙墓出土遺物の検討-」『青森県考古学』第10号
- 8 当該小鉄片は、覆土上層からの出土であるが、当該期の土壙墓においては、壙底とならんで壙口付近(埋土内・直上)への副葬(供献)例も知られている。(注6同)
- 9 菊池俊彦氏は、釧路市貝塚町1丁目遺跡出土鉄片ならびに羅白町植別川遺跡出土の刀子は、アムール流域よりサハリンを経てもたらされたものと推定している。菊池俊彦 1990「北方大陸からの鉄」『北の鉄文化シンポジウム予稿集 鉄をととして北の文化を考える-古代末~中世を中心として-』
- 10 阿部義平 1999『蝦夷と倭人』シリーズ日本史のなかの考古学
- 11 辻 秀人 1996「蝦夷と呼ばれた社会-北奥地方社会の形成と交流-」『古代蝦夷の世界と交流』
- 12 能登谷宣康 1999「福島県内における製鉄・鍛冶遺構の調査研究の現状」『東北地方にみる律令国家と鉄・鉄器生産 1999年度(第6回)鉄器文化研究集会資料集』

- 13 小林克 1991「農耕社会に南下した狩猟採集民」『考古学ジャーナル』341
- 14 盛岡市教育委員会 1997『永福寺山遺跡』
- 15 注10同
- 16 八戸遺跡調査会 2001『田向冷水遺跡Ⅰ』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第1集
- 17 小保内裕之氏のご教示による。
- 18 注5同
- 19 福田豊彦1996「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』57
- 20 福田豊彦1995「鉄を中心にみた北方世界」『蝦夷の世界と北方交易』
- 21 熊谷常正1990「古代東北の鉄生産」『北の鉄文化』岩手県立博物館
- 22 福田豊彦氏は、律令国家の蝦夷対策としての製鉄兵站基地と位置づける（注20同）。
- 23 注21同
- 24 八木光則 1996「蝦夷社会の地域性と自立性—陸奥を中心として—」『古代蝦夷の世界と交流』
- 25 下田町教育委員会 1988『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 26 八戸市教育委員会 1991『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ 丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集ほか
- 27 注24同
- 28 八戸市教育委員会 2002『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ 丹後平古墳群 丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第93集ほか
- 29 注30同
- 30 下田町教育委員会 2003『下田町内遺跡発掘調査報告書6 十三森（1）遺跡・天神山遺跡墳』下田町埋蔵文化財調査報告書第19集
- 31 百石町教育委員会 1995『根岸（2）遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第4集
- 32 八戸市教育委員会 1989『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 田面木平（1）遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 33 青森県教育委員会 1991『中野平遺跡 第二みちのく有料道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書134集
- 34 たとえば百石町根岸（2）遺跡における最大の住居である第7号住居（約10㎡四方）からは、小札・蕨手刀・刀子・砥石等が集中的に出土しており、首長クラスの住居と目されている。（注31同）
- 35 高橋 学 1996「古代末の出羽—米代川流域の徹閑連遺跡—」『季刊考古学57』
- 36 小松正夫 1996「元慶の乱期における出羽国の蝦夷社会」『古代蝦夷の世界と交流』
- 37 青森県教育委員会 2003『西浜折曾の関遺跡—西海岸広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書341集
- 38 高杉博章・木村徹次郎 1975「津軽半島における擦文式土器の新例と問題点」『北奥古代文化』7
- 39 青森県市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 2000『十三湊遺跡—第86次発掘調査報告書—』市浦村埋蔵文化財調査報告書第11集
- 40 桜井清彦 1958「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』
- 41 秋田城ならびに近隣の後城遺跡から、まとまった量の多条沈線文土器群が見つかった（高橋 学 1997「口縁部に沈線文をもつ土師器—秋田県域での事例—」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ資料集—』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会）。当該土器の起源は秋田城周辺とも考えられる。
- 42 注24同
- 43 注24同
- 44 注35同
- 45 三浦圭介 1993「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学』
- 46 9世紀中葉に位置づけられる黒石市甲里見（2）遺跡第2号竪穴住居跡からは、土師器・須恵器ともに、土馬・勾玉・小形土器・つまみ型土製品等が出土している。（黒石市教育委員会 1989『甲里見（2）遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告書第8集）
- 47 宇部則保 2000「馬淵川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報3
- 48 八戸市教育委員会 1996『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ 丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 49 八戸市教育委員会 1993『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第49集
- 50 注36同

51 当該期の実情を反映しているとされる「延喜式」禄物価法において、陸奥や出羽で、鉄の価格が他国の2~3倍に及ぶこと、元慶の乱で焼かれた秋田城の武器の大半が皮製の甲や、木製の胃であったことから9世紀後半頃までは鉄生産が増大していなかったとする福田豊彦氏等の見解がある。(注20同)

52 注35同

53 秋田県教育委員会 1989『福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡』一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 秋田県文化財調査報告書第178集

54 齋藤 淳 2001「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『研究紀要』4 青森大学考古学研究所

55 熊田亮介 2000「九世紀における東北の地域間交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』84

56 注35同

57 青森県内における古代の鉄器平均7.5%を占める「手鎌」は鉄器の用途における課題の一つである。両端に目釘痕を残す片刃の形態の鉄器であるが、「穂摘具」あるいは「苧引金」等と称されているものを含む。もとより前者は穀類の収穫具としての位置づけから農具として、後者は麻の繊維を掻き取る紡績具の範疇として理解されるものであるから、厳密には用途が全く異なる用具として理解されているわけである。いわゆる「穂摘具」は、全国的には石包丁に換わって弥生時代末から古墳時代にかけて盛行し、稔熟の一定しない初現期の稲の穂首刈りに用いられたと解釈され、種の安定に伴って根刈り用の鉄鎌へと置換される性質のものであると解釈されている。

右の解釈に従えば、北奥地方における急速な稲作農耕の展開は、耐寒冷種の出現定着まで、念熟の不揃いもしくは不念熟の割合が高いがために穂首刈りを余儀なくされ、平安後期まで「手鎌」が鉄鎌とともに併存したとも考えられる。その場合は時の経過とともに比率を減じて次第に鉄鎌への置換がみられるはずであるが、北奥地方においては古墳時代に出現が認められる鉄鎌よりも後出であり、律令期以降普及するようであり、時間の経過とともに漸減する兆候も認められない。

一方「苧引金」は、紡錘車とともに麻の栽培と麻糸の生産を意味する用具であり、古代の信州地方においては「コ」の字型の苧引金具が盛行するほか(岡田正彦 1996「長野県の鉄製品と製鉄・鍛冶関連遺物」『信州の人と鉄』)、中世においても同様の形態のものが普通に見られる。また、浪岡町山元(2)遺跡(青森県教育委員会 1995『山元(2)遺跡 浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書171集)において、麻の実が付着した当該製品が出土していることも「苧引金」との解釈を有利にしているが、上記のごとく形態がやや異なること、また実際の出土例では必ずしも紡錘車とセットにならず、むしろ鎌と共伴する例も多いこと等から疑問が残る。

本稿では疑問を残しながらも「穂摘具」的機能を優先させ、農具として取り扱ったが、実態は、汎用具として性格が強いものであろう。なお同様の見解を述べている浅田智春氏は、中世の「苧引金」は系譜が異なると推定している(青森県教育委員会 2003『野木遺跡Ⅲ 青森中核工業団地整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書281集)。

汎用の掘削具と考えることも可能な鍬(鋤)先や、狩猟用か戦闘用か評価の分かれる鎌についても同様であり、鉄器組成から生産等を規定するにあたっては、遺存の限界性も含めて慎重な検討が必要であろう。

58 青森県教育委員会 2000『砂子遺跡 八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書280集

59 八戸市教育委員会 1991『風張(1)遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集

60 注58同

61 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡 東北縦貫自動車道八戸線(八戸~八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書287集

62 青森県教育委員会 1977『鳥海山遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道青森県内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書032集

63 注47同

64 設楽政健 2002「青森県内の製鉄遺跡 一炉形状からの再検討」『青森県考古学』第13号

65 例えば、青森市朝日山(2)遺跡第205号竪穴住居跡ならびに外周溝からは、各種の鉄器とともに錫杖状鉄製品・土玉ほか、鉄鉗・砥石等の鍛冶関連遺物が出土している(青森県教育委員会 2002『朝日山(2)遺跡Ⅴー県道青森浪岡線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告一』青森県埋蔵文化財調査報告書325集)。

66 下山信昭 1996「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第1号 青森県埋蔵文化財調査センター

67 井上雅孝 2002「錫杖状鉄製品の研究ー北東北における古代祭祀具の一形態ー」『岩手考古学』第14号

68 三浦圭介 1991「本州の擦文文化」『考古学ジャーナル』341

69 齋藤 淳 2002「本州における擦文土器の変遷と分布について」『一市川金丸先生古稀記念献呈論文集ー海と考古学とロマン』

- 70 齋藤 淳 2003「古代の区画施設を有する集落—古代環濠集落の景観—」『遺跡と景観』
- 71 注69同
- 72 注69同
- 73 赤沼英男 2000「第3節 出土遺物の組成からみた砂子遺跡における鉄器製作とその使用」(注58同)
- 74 例えば当該期の区画集落である浪岡町高屋敷館遺跡においては、200点前後の羽口と20,000点以上の鉄滓が出土している(青森県教育委員会1998『高屋敷館遺跡 浪岡バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書243集)。
- 75 刀子、農具(鋤(鋤)先・鎌・手鎌)、漁具(銚・釣針)、鍛冶具(鑿・金鉗・金槌)、工具(斧・ヤリガンナ・鑿等)、紡績具(紡錘車)、調理具(鍋・内耳鍋)、日用具(鉄・火打金等)、武具(小札・刀・鎌・刀装具)、馬具、宗教具(鈴・錫杖)に分類した。分類における問題点については、注57参照。
- 76 注31同
- 77 青森県教育委員会 1980『大平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書52集
- 78 注58同
- 79 青森県教育委員会 1986『沖附(1)遺跡 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書100集
- 80 注77同
- 81 北林八洲晴 1987「第V章 分析・考察」『弥栄平(4)(5)遺跡発掘調査報告書 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書106集
- 82 三浦圭介 1995「古代」『新編弘前市史 資料編1-1 考古編』

図表出典

図1 下田町教育委員会 1988『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第1集 ほか を一部改変／図2 八戸市教育委員会 1991『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ 丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集 を一部改変／図3 盛岡市教育委員会文化財調査室 1999『藤手刀集成(第2版)』文化財資料集第2集 ほか を基に作成(分布図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)・20000(地図画像)を利用し、カシミール3D Ver8で作成)／図4 熊谷常正1990「古代東北の鉄生産」『北の鉄文化』岩手県立博物館 を一部改変・加筆／図5 八戸市教育委員会 1989『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 田面木平(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集 を一部改変／図6 百石町教育委員会 1995『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第4集 を一部改変／図7 青森県教育委員会 1991『中野平遺跡 第二みちのく有料道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書134集 を一部改変／図8 宇部則保 1997「7・8世紀の沈線土師器—青森県—」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ資料集—』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 を基に作成(分布図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)・20000(地図画像)を利用し、カシミール3D Ver8で作成)／図9 八戸市教育委員会 1996『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ 丹後平(1)遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集 を一部改変／図10 八戸市教育委員会 1993『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第49集 を一部改変／図11 東日本埋蔵文化財研究会北海道大会準備委員会 1997『第6回東日本埋蔵文化財研究会 遺物からみた律令国家と蝦夷 資料集』より転載／図12 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡 東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書287集 を一部改変／図13 青森県教育委員会 2001『安田(2)遺跡Ⅱ 東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書303集 を一部改変／図14 青森県教育委員会 1995『山元(2)遺跡 浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書171集 を一部改変／図16 青森県教育委員会 1997『垂柳遺跡・五輪野遺跡 南津軽広域農道改良事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書219集 を一部改変／図17 桜井清彦・菊池徹夫編 1985『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室報告 を一部改変／図18 青森県教育委員会 1980『碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書54集 を一部改変／図19 志波城・秋田城については、津野 仁 1999「古代の鍛冶遺構と鉄器生産—軍事と官衙造営の関連から—」『東北地方にみる律令国家と鉄・鉄器生産 1999年度(第6回)鉄器文化研究集会資料集』を基に作成／図21 青森県教育委員会 1986『沖附(1)遺跡 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書100集 を改変／図22 青森県教育委員会 1994『山元(3)遺跡 浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書159集 を改変／図23 青森県教育委員会 2000『砂子遺跡 八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書280集 を改変／図24 青森県教育委員会 1980『大平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書52集 を改変／表1 井上雅孝 2002「錫杖状鉄製品の研究—北東北における古代祭祀具の一形態—」『岩手考古学』第14号 を基に作成